

# 東京七座会

平成30年春号 (No.15)

藤棚の花もゆらゆらゆれて、日中は汗ばむほどの陽気となり夏の近いことを実感する季節になりましたが、会員の皆様にはお変わりなく、お健やかに暮らしたことと存じます。

平成29年のふるさと会は、第29回東京七座会が6月24日に神保町ダイニングカフェ『エスペリア』で、出席者18名で開催しました。佐藤キミ子(33)さんが弟妹と一緒に参加しジャンゴ弁まる出しの会話に大笑いとなり、童謡『ふるさと』の合唱ではアンコールがでる程でした(笑)。改めて、郷里を想い懐かしむひとときとなりました。

他方、第30回東京鷹巢会は10月8日に九段下『ホテルグランドパレス』に会場を移し、結成30年の記念大会として約230名の参加がありました。30周年を祝うためにはるばる綴子下町からやって来た「獅子踊り」の一行が会場を踊りまくり、小太鼓の小気味いい響きや笛の音に綴子出身者のなかには懐かしさのあまり目頭を押さえる姿もあり、久々に聞いたふるさとの祭り囃子に会場は感動の渦となりました。当会からは、小笠原重信(39)さん・仲村誠(39)さん・野呂幸平(53)さんの初参加を含めた10名の出席でした。

※会員の動向については、入会2名・退会12名により107名(他に住所不明10名)の会員数となっております。

入会者	退会者	《氏名の前数字:中卒年》			
39小笠原 準義	23佐藤 与末(死亡)	30古川 壽子(死亡)	34戸澤 哲夫 (死亡)	34西山 萬里子(都合)	
40星野 のり子	28山形 悦 (都合)	32伊藤 キワ(都合)	34黒川 とし子(死亡)	41石井 幹子 (都合)	
	29成田 金義(死亡)	32戸澤 哲朗(死亡)	34熊谷 誠 (死亡)	43松岡 茂 (死亡)	

亡くなられた方が多い年となり、残念でなりません。ご冥福をお祈り致します。(合掌)



第29回東京七座会



第30回東京鷹巢会



小笠原重信 仲村誠 野呂幸平



## 七座のあれこれ

**【野呂重左エ門家】** 前山の旧家である。宝永4年(1707)の部落をあげての移動の時、一族はみな現在の前山へ移ったが、権三郎(後に絶家)だけは、川向いの大向に住むことになった。この系統が大向の野呂家である。(『ジュスケ』の家です)

**【小笠原家】** 花輪からきて、前山村支郷の二本杉村宇喜右エ門岱に居住したと伝えている。本家は治左エ門であるが、その系統が絶えたので、治五右エ門が本家を継ぐことになった。天保年間に戸沢家の後を受けて村の肝煎になったのが林平(後に治五右エ門)で、この人の代から苗字御免の家柄となった。

**【小前家】** 小前嘉助という著名な鍼(ハリ)師がいた。七座地区はもちろん、鷹巢・大館を回って治療にあたり、その評判がすこぶる良かった。得意な技術は、腹痛・腫物の治療で、「ギシン」という金属筒を患部にあて中にゴミを入れて悪血を取るとデモノなどは立ちどころに治ったという。小笠原家の別家である。

**【武田掃部助家】** 武田姓というと甲州(山梨)でその名の知られた義光流武田氏を思い浮かべるが、今泉の武田家は比内地方に来て浅利の家臣となった武田の別れで、今泉以前は粕毛の根城(藤里町)に住んでいた。根城は粕毛から溪流に沿って約6kmさかのぼった山村である。この辺の山間部は、戦国のころに浅利氏が戦いに敗れて逃げ込んだ隠棲の土地である。根城から今泉に移ったのは、武田掃部助と清兵エの兄弟であった。別家を増やし、又左エ門、又兵エ、七兵エ、和右エ門、長左エ門は兄の掃部助の系統で、作十郎は弟の清兵エの系統である。

**【仲村三十郎家】** 元禄年間の長百姓に名を連ねている。三之丞は三十郎の弟分家で、安永年間に一時肝煎をつとめた治左エ門も仲村姓である。

《後記》「弁慶の足」は龍ヶ鼻トンネル(S40~H18・12月)横に新道が開通するまででありました。小学校の登下校時が懐かしい。(熊谷忠憲)

**＜龍ヶ鼻山の弁慶石＞**のこと  
頂上に露出している岩塊は、さながら中空に向かって躍り上がろうとする龍の頭に似ている。山上の突出部は通称「弁慶の足」と呼んでいた。

◆平泉を逃れた義経は、松前(北海道)へ渡ったが、弁慶は、主人の後を慕って追ったが、追い付くことができなかった。途中、今泉集落の龍ヶ鼻に上って東方を遠望したが、義経の姿を発見することができなかった。さすがの弁慶も、主人の後を追うのをあきらめて、そこにはしばし休憩したが、疲れからついに深い眠りにはいってしまった。弁慶の眠りは雪が降り、そして消えて若草が生え茂ってもさめず、ついにそのまま石になってしまった。